月性画像　林道一画並賛・黙霖賛

次に展示館に入ってみましょう。まずは、正面奥のケースにある「月性画像　林道一画並賛・黙霖賛」（「月性剣舞之図」とも呼ばれる）をご覧下さい。

福岡藩の林道一という人が、安政二年六月二十六日から八月九日頃まで妙円寺に長期滞在し、その離別に際して、清狂草堂北窓の下で描いて、師に贈ったものと言われています。(注)

剣を天に向け、じっと正面を見つめるその姿は、国を守るという確固たる意思の表れを示しています。身なりも行動も、実に豪快であった師の生涯を余すところなく表現したこの画像は、遺品の中でも特筆するものと言えるでしょう。

「琴石山…林道一」までの部分が画像と同じ林道一の賛、「這肖像…敬題」までが、明治二十年妙円寺を訪れた際に書き足した黙霖によるものです。「遺愛の物」とありますから、月性師はこの剣舞図を大切にしていたことがわかります。そして、「今ほとんど三十六年、この一軸をみるになお上人にまみゆるがごとく、涙をふるってここに記す」とありますから、黙霖師にとって月性師は特別な存在であり、幕末動乱期に共に歩んだ在りし日を懐かしんだのでしょう。

（注）『維新の先覚月性の研究』　月性顕彰会
マツノ書店　昭和五十四年五月一日　一四〇頁

琴石山頭風琴を鼓し
曲調の流水竜吟を発す
山下の豪僧剣舞を能し
独り皇国を憂て丹心を竭す
乙立秋の朝後日清狂堂北窓之下に於て此の
図を作し并て以て主人和尚留別に題す
西海隠士林道一

這の肖像者上人平生の精神之在る所に而、且遺愛の物と為す也。妙円寺代々住職宜珍蔵之上人伝友人土屋蕭海之を造る。詩名天下に動す、昔山口に在るを想い上人の剣舞酒間に吟歌す、今に至る不忠之哢、今殆ど三十六年、此の一軸を視るに猶上人に見が如く、涙を揮て焉に記す。

一剣の歌舞　光を千古に添う
鼓海之浦　琴山之土
青き攸観を知る　名は海宇に動す
明治二十年丁亥十一月
友人源雄綱敬て題す

（訳文　福本幸夫）

月性画像　林道一画並賛・黙霖賛

落款

琴石山頭風鼓琴曲調流水発
竜吟山下豪僧能剣舞独憂
皇国竭丹心
乙朝立秋後日作此図於清狂堂北窓
之下并題以留別主人和尚
西海隠士林道一　落款

落款

這肖像者上人平生精神之所在而
且為遺愛物也妙圓寺代〻住職宜珍蔵之上人伝友人土
屋蕭海造之詩名動天下想昔在山口上人剣舞酒間吟
歌至今不忠之距今殆三十六年矣視此一軸猶如見上人揮
涙記焉
一剣歌舞　光添千古　鼓海之浦　琴山之土
知青攸覩　名動海宇
明治二十年丁亥十一月　友人源雄綱敬題　落款　落款

絹本釋月性画像

その隣にもう一枚、本願寺から賜ったいかにもお坊さんという月性画像があるのですが、作者不明ながらもこの絵自体の色使いはたいへん素晴らしいものでして、先程の林道一の月性像が『動』ならば、この絵は、所々で垣間見える月性の繊細な心を表した『静』の月性像と言えるでしょう。師の行動には、母を想い、家族を想い、そして門下生や交流する全ての人達への愛情が随所に感じられます。「詩を作るも尋常の詩人たるを欲せず、放吟満腹経綸を吐く。酒を飲むも尋常の酒客たるを欲せず、一酔胸中兵戟躍る。」そんな豪快さの裏には、万人への優しい心がしっかりと根付いていたからだと言えるのかもしれません。

絹本釋月性画像

2008.4.1(財)月性顕彰会